

地域密着型サービス評価の自己評価票

(部分は外部評価との共通評価項目です)

取り組んでいきたい項目

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営				
1. 理念と共有				
1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	法人の理念である「人類愛善～ひとりひとりを大切に～」のもと、「地域ニーズを発見し、サービスへつなぐ」を法人全体の平成21年度のテーマとし、グループホームにおいては、昨年度末のカンファレンスにて、スローガンについて振り返り、今年度も引き続き、「その人らしい暮らしを支える」をスローガンとして、それをもとに事業計画を立て、ご家族や地域の方とのつながりを大切にしたい暮らしづくりに努めている。	○	昨年の外部評価以後、ご家族や地域の方たちに、理念を知ってもらうよう、グループホームのパンフレットに、法人理念、グループホームのスローガンを明記した。
2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	開設から5年が経過する中で、ご利用者の重度化や認知症の進行に伴い、それぞれのご利用者の思いや望まれる暮らしの把握が難しくなり、スタッフも、一人ひとりのご利用者の思いを引き出し、その思いをもとに実践へつなぐ事について、悩む事が多く、チームで支えあって前向きな実践をするために、スタッフ間で思いを共有する事、チーム力を向上させていく事の必要性を強く感じている。	○	昨年度、チームで取り組んだセンター方式の見直しは不十分であるため、現在、チームで必要な部分の見直しを行っている。昨年度後半、思いや気づきの共有や、チーム力の向上に向けて、カンファレンスのあり方や、記録の様式や方法について検討し改善した。今後は、それらを有効に活用する事で、チームとして理念の実現に向けたケア実践の方向性を明確にしていきたい。
3	○家族や地域への理念の浸透 事業所は、利用者が地域の中で暮らし続けることを大切にしたい理念を、家族や地域の人々に理解してもらえよう取り組んでいる	入所前から、ご家族や地域の方とのつながりを重視し、ご利用者の暮らしを共に支えていける関係づくりに努めている。必要に応じ、ご家族や地域の方との話し合いの機会を持ち、それぞれの立場で、ご利用者の暮らしを支える事においてできる事について話し合う機会を持つよう心がけている。一人のご利用者の暮らしを考えていく中で、ご家族や地域の方にとっても、スタッフにとっても、学びの機会となる事は多い。	○	ご利用者の認知症の進行にともない、馴染みの場所へ行ったり、馴染みの人に会ったりする事についても、きめ細かい心配りが必要となる事も増えてくるため、これまで以上に、ご家族や地域の方との話し合いの機会を多く持つていく必要がある。
2. 地域との支えあい				
4	○隣近所とのつきあい 管理者や職員は、隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらえるような日常的なつきあいができるように努めている	民家と少し離れている事や、大規模な総合施設である事から、気軽に立ち寄るという環境ではないのかもしれないが、地元自治会の行事に参加したり、法人の夏祭りや、子ども会との交流会などをとおして、交流の機会は増えてきている。昨年開設されたケアハウスのたのやまの運営推進会議の委員である、地元自治会長さんからも、そういった交流から松寿苑を知る事により、日常の中でもご利用者の暮らしに関心を持つようになったという話を聞いている。	○	ケアハウスたのやまの運営推進会議にて、地元自治会長とのつながりも以前より身近なものとなり、互いに話し合いやすい関係ができてきたため、今後、そのつながりを交流行事や地域行事への参加の機会に活かしていきたい。そういったつながりを通して、法人全体が地域にとって身近な存在と覚えてもらえるようなかわりを進めていきたい。ホール「おあしす」も、地域住民の集える場としての活用方法も検討していく。
5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	法人全体の行事(夏祭り、七夕交流会など)には、地域住民も多数参加され、グループホームのご利用者にとっても交流の機会となっている。産業祭りに参加し、昔の遊びや味、車椅子体験のブースを設け、地域の方たちとの交流を図っている。地域の文化祭にはご利用者の作品を出品し、当日は見学に行き、地域の方との交流の場となっている。ご利用者については、毎日の暮らしの中で買い物や趣味の会、美容室など、地域へ出かけていく事は多い。	○	毎日の暮らしの中で地域へ出て行く事については、ご利用者の状況により、次第に細かな配慮を必要とする場面も増えてきているため、行きつけの商店の方、美容室の方、趣味の会の方などと話し合う機会を持ち、ご利用者が安心して楽しみながら地域へ出て行けるような環境づくりを進めていく必要がある。

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
6	○事業所の力を活かした地域貢献 利用者への支援を基盤に、事業所や職員の状況や力に応じて、地域の高齢者等の暮らしに役立つことがないか話し合い、取り組んでいる	在宅介護されている方から、相談を受ける事がたびたびあり、時間をかけて話を聴かせていただくよう心がけ、可能であればアドバイスやサービス紹介などを行っている。手紙のやりとりなどしている方もいる。市が主催する認知症ケア研修にて、依頼があれば実践とおしての話をする機会を持つ事もある。キャラバンメイト活動への協力体制もっている。スタッフについては、ご利用者の暮らしを通しての地域とのつながりから、地域へ向けての視野を広げ、ニーズに気づけるよう、機会があれば話し合いをするようにしている。	○	松寿苑インフォメーションとして、情報、相談、案内窓口を明確にしたものを、8月の松寿苑広報誌と一緒に、地域に向けて配布する予定としている。その中に、認知症についての相談窓口として、グループホームの連絡先も明記してある。今後、地域の方が困った時に気軽に相談できる場所となり、そこから次の活動へ結び付けられるよう、法人全体で取り組んでいきたいと思う。
3. 理念を実践するための制度の理解と活用				
7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	外部評価を受ける事で自分たちのケアの振り返りになり、今後の方向性について、チーム全体で考える機会となる。評価結果をもとに改善できた部分も多い。自己評価については、スタッフ一人ひとりが自己評価内容についての振り返りを行った後、チーム全員でカンファレンスを行った。	○	外部評価での自己評価や、第三者による評価をもとに、自分たちに足りない部分を改善できるが、その改善点をチームで有効に活用できていないものもあるため、今後は、改善点や気づいた点についての振り返りの機会をくりかえし持ち、チームで有効に活用し、より充実したものにしていける必要がある。
8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ご利用者の暮らしの様子、事業計画や事業報告、外部評価への取り組みなど、できるだけ詳しく説明し、それぞれの立場からの意見を聞き話し合っている。委員の方の話を聞く事で、地域にある課題やニーズを知る事ができ、それをもとに、自分たちがすべき事について考える良い機会となっている。委員の方は、グループホームのケアについての、よき理解者であり、スタッフが励まされたり、支えられたりする事も多い。	○	委員の方のそれぞれの立場からの意見はとても参考になる事が多いため、今後、認知症の方の地域での暮らしのために、協力しながら、何か取り組める事がなくないか検討していきたい。
9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	運営推進会議の委員としての参加や、運営上の相談をする事も多く、話し合いやすい関係ができていっているように思う。年に数回であるが、市や社協と連携し認知症ケアに関する研修を行ったり、キャラバンメイトの連絡会などの活動も行っている。	○	今後、地域で暮らしておられる認知症の方や、そのご家族、近隣の方達のニーズをしっかりと拾い上げ、そこから、自分達の役割をともに考えていきたい。
10	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、地域福祉権利擁護事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、必要な人にはそれらを活用できるよう支援している	現在まで制度の活用を必要とされるケースはない。管理者や法人のケアマネージャー、相談員などは制度について理解しており、必要な場合には活用に向けての支援が可能である。	○	スタッフにも、学びの機会(研修会・文献など)を持ち、必要となった場合や相談を受けた際など、支援のできる体制を整えておく必要がある。
11	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内で虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人内の研修や外部研修に参加し、そこでの学びを報告し、スタッフ全員で共有できるようにしている。法人内のサービス質検討委員会により、年1回、ご利用者、ご家族すべてにアンケート調査を行い、サービスに対する意見を聞き、その結果から、委員会より法人全体に課題提起し、カンファレンスの機会を設けている。スタッフ間でかかわりの中での悩みを話し合える機会を多く持ち、チームスタッフ同士が思いを共有し、支え合える関係作りにも努めている。	○	日々のかかわりをチーム全体で振り返り、ご利用者本位のケア提供となっているのかを考える機会をくりかえし持っていきたいと思う。アンケート結果などの、ご利用者やご家族の声を真摯に受け止め、サービスの質の向上に努めていきたい。法人内の身体拘束ゼロ推進委員会より、苑内研修にて、身体拘束や虐待についての学びの機会を持つ予定としている。

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
4. 理念を実践するための体制			
12	○契約に関する説明と納得 契約を結んだり解約をする際は、利用者や家族等の不安、疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所時に、契約書、重要事項説明書にて説明し、同意を得ている。利用料の変更や、ターミナルケアなど、その時々で、ご利用者やご家族に説明が必要となった場合についても同様に、説明の機会を持ち、同意を得ている。	○ ご利用者の高齢化や重度化が進む中、ターミナル期にある方もおられ、ご家族も不安を感じられる事が増えてくると思われるため、これまで以上に、話し合う機会を多く持ち、納得していただいた上で、ご利用者の暮らしについて、一緒に考えていける関係づくりに努めていきたい。
13	○運営に関する利用者意見の反映 利用者が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	常に、ご利用者の思いをじっくりと聴き、表情や行動から不満や不安を感じ取れるよう心がけているが、次第に思いを表現する事や、言葉にする事が難しくなってこられる方も多く、思いを知る事が難しいと感じる事が増えてきている。定期的に介護相談員を受入れ、ご利用者の話を聴いてもらうとともに、スタッフとの意見交換の機会を設けている。	○ ご利用者の重度化や認知症の進行に伴い、待つだけでなく、ご利用者が思いを表現しやすいようなかかわり、環境づくりなどのアプローチをチームで検討していく必要がある。かかわりの中での気づきをチームスタッフに伝え、共有する事を、今まで以上に意識し、実践につないでいけるようなチームづくりをしていきたい。
14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	月に1回、すべてのご家族に、手紙にて1ヶ月間の様子や、スタッフの異動、金銭管理などについて報告している。入所間もないご利用者や、体調が不安定なご利用者については、必要に応じて電話やメールにて報告している。	
15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	法人の苦情相談窓口、市の相談窓口、国保連の相談窓口について書面に明記し、説明している。法人のサービス質検討委員会にて、ご利用者、ご家族に対するアンケートを年1回行っている。面会時や電話、手紙やメールのやりとりなどにて、ご家族が意見を言える機会をできるだけ多く持つように心がけ、そこで聴く事のできた事柄をチーム全体に伝え、ケアに反映するようにしている。	○ ご家族からの不満や苦情、意見はあまり聞かれないが、ご家族の立場として、そういった意見は言いにくいものである事を理解し、言いやすい環境づくりに努めていかなくてはいけないと思っている。行事などをとおして、ご家族同士の交流の場を設け、同じ立場の者同士で、話し合える機会づくりも必要だと思う。
16	○運営に関する職員意見の反映 運営者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日常のカンファレンス、毎月のスタッフ会議、育成面接などで、スタッフが意見や提案できる機会を設け、反映させられるよう心がけている。必要に応じて、スタッフと個別に話し合う機会も持つようにしている。	
17	○柔軟な対応に向けた勤務調整 利用者や家族の状況の変化、要望に柔軟な対応ができるよう、必要な時間帯に職員を確保するための話し合いや勤務の調整に努めている	ご利用者やご家族の要望、ご利用者の体調などの状況に合わせた対応をするため、必要に応じてスタッフ間で話し合い、勤務の調整を行っている。グループホームのスタッフだけでは、どうしても対応が困難な場合は、併設施設からのサポートが得られるような体制づくりをしている。	
18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	法人の新規事業(グループホームうえずぎ・ケアハウスたのやま)開設に伴い、スタッフの異動を行ったが、その際は、開設準備の間に次に採用されるスタッフを余剰人員として採用し、実際の異動時期の混乱を最小限にとどめられるよう配慮している。	○ グループホームは、法人内で認知症ケアを通してのスタッフの育成の場として位置づけられており、今後もスタッフの異動は予定している。他部署でのケアを経験した上で、グループホームに異動する事で、あらためて、ご利用者の暮らしを作っていくこと、ご利用者本位のケアについての気づきも多いようであるし、スタッフの異動にて、法人内に馴染みの関係のあるスタッフが増えるというメリットもある。今後も、ご利用者へのダメージにじゅうぶんに配慮しながら、そういったメリットを活かしていきたいと思う。

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
5. 人材の育成と支援			
19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修の機会は多く確保されており、受講希望者を募ったり、段階に応じた研修の機会の提供に努めている。法人内に、スタッフ育成チームを設置し、研修や意見交換会の機会も持っている。スタッフ個別には、年に2回、人事考課の育成面接にて個人の目標設定と振り返りを行っている。しかし、法人全体において、研修の場と現場がリンクしてこない現状もあり、今後、リーダークラスや中堅クラス学びの場を充実させる必要がある。認知症ケアについても温度差が見られるため、学びの機会を検討していきたい。	○ 研修の機会と現場をうまくリンクさせていくため、これまで続けてきた入職時から3年までの研修以外に、法人全体で、リーダークラス、4～6年、7年以上の階層別研修、認知症ケアに関する研修を計画している。
20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	スタッフは、認知症介護実践者研修の実習などを通して、他施設との交流がある。管理者については、他のグループホームからの依頼で実習を受け入れる事もあり、その後も、時々、互いに情報交換を行っている。	
21	○職員のストレス軽減に向けた取り組み 運営者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる	チームスタッフ間で、思いを共有し、支え合ってケア実践ができるよう、カンファレンスの充実にも努めている。管理者やリーダーは、一人ひとりのスタッフの現状の把握に努め、その時の状況に合わせたサポート体制を整えるように心がけている。法人内で意見交換会を実施し、他部署のスタッフや同期のスタッフとのカンファレンスの場を設けている。	○ 開設から5年が経過し、ある程度、チームの形が出来上がってきたが、そんな中で、一人ひとりのスタッフが慣れからくる、チームの停滞を感じ、次へのステップアップの必要性を感じている。そんな中で、チーム全体で、もう一度、チームの状況を振り返り、カンファレンスのあり方や、前向きな実践力について、時間をかけて考えていく必要がある。
22	○向上心を持って働き続けるための取り組み 運営者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、各自が向上心を持って働けるように努めている	スタッフの日々の実践については、管理者から運営者に報告し、一人ひとりのスタッフの育成について話し合いの機会を持っている。年2回の人事考課では、リーダーがチームスタッフの育成面接を行い、その後、各スタッフの目標や課題について、リーダーと管理者にて話し合いの機会を持ち、スタッフが自分の目標に向かって前向きに取り組んでいけるようなサポート体制を検討している。	○ ご利用者の重度化が進み、ターミナル期にある方もあり、また、認知症の進行により、かかわりの難しさを感じる事も多い中、スタッフも不安を感じたり、悩む事が増えてきているため、今まで以上にスタッフ一人ひとりの状況をしっかりと見て、適切なサポートをしていく必要性を感じている。
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援			
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応			
23	○初期に築く本人との信頼関係 相談から利用に至るまでに本人が困っていること、不安なこと、求めていること等を本人自身からよく聴く機会をつくり、受けとめる努力をしている	入所前に、ご家族とともに、ご利用者に面接を行い、じっくり時間をかけて思いを聴く中で、今後の暮らしを共にささえていけるよう努めている。担当ケアマネ、利用サービス担当者、近隣の方などからの話を聴く機会も設けている。収集した情報については、センター方式にてスタッフ全員で共有できるようにしている。	
24	○初期に築く家族との信頼関係 相談から利用に至るまでに家族等が困っていること、不安なこと、求めていること等をよく聴く機会をつくり、受けとめる努力をしている	ご家族との関係については、開設時より大切にしよう心がけてきており、ゆっくりと時間をかけて話し合う機会を多く持つようになっている。入所後も、ご利用者のその時々状態に応じて、情報提供を丁寧に行い、相談し合える関係づくりに努めている。	

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
25	○初期対応の見極めと支援 相談を受けた時に、本人と家族が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談を受けた際、抱えておられるリスクや家族関係、入所してからの暮らしの可能性、在宅生活継続の可能性などを、ご家族、スタッフ、担当ケアマネ、サービス担当者、医療関係者などとともに検討し、入所の決定や、在宅生活継続のためのサービスのコーディネートなどを行うようにしている。在宅にて介護されているご家族と、電話や手紙などで、継続して連絡を取り合う関係を継続している方もある。		
26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入所前から、ご利用者、ご家族と話し合いを繰り返し、できるだけ不安を感じずに馴染んでいただけるよう対応している。必要であれば、ご家族の宿泊や、自宅への外泊の機会も持ってもらうながら、ゆつくりとグループホームの暮らしに慣れていただけるようにしている。最近入所された方については、さまざまな事情から、在宅での独居生活の時から、自宅を訪問したり、グループホームに招くなどの関係を継続し、馴染みの関係ができてい中で入所となり、比較的スムーズにグループホームでの暮らしに馴染んでいただく事ができた。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援				
27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしなが喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	常にスタッフは、ご利用者とともに暮らしている事を意識し、同じ時間を共有できるような関係づくりに努めている。そんな中で、長い人生経験のあるご利用者から教えていただく事は多く、ご利用者の言葉や笑顔に支えられる事も多い。しかし、ご利用者の重度化にともない、寝たきりの状態で一日のほとんどをベッド上で過ごされる方もあり、そういった方に対する楽しみや喜びの機会についてのアプローチが不十分なのではないかと感じる。	○	ベッド上で寝たきりの状態にあるご利用者の楽しみや喜び、気分転換、快適な環境などについて、これまでのかかわりの中から感じる事のできた「その人らしさ」をもとに検討していく。
28	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽を共にし、一緒に本人を支えていく関係を築いている	開設時より、ご家族との関係を大切にしたいという思いで、ご家族との関係づくりに努めてきており、ご家族にも、スタッフと一緒にご利用者の暮らしを支えて行く事について、繰り返し伝えるようにしているため、程度の違いはあるが良い関係が築けている。昨年からのターミナルケアを経て、今年4月に亡くなられた方のご家族に関しては、互いに悩みや不安を感じる事も多かったが、何度も話し合いを繰り返しながら、一緒にご利用者の最期を看取る事ができ、スタッフがご家族に支えられていると強く感じる事のできる、とても貴重な経験となった。		
29	○本人と家族のよりよい関係に向けた支援 これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係が築いていけるように支援している	入所前から、ご家族のご利用者への思い、ご利用者のご家族への思いを丁寧に聴き、理解した上で適切な援助ができるよう努めている。月1回の手紙にて、ご利用者の暮らしの様子を報告したり、その時々々の状況に合わせて、電話などで連絡を取り合ったり、ご家族の訪問時は、できるだけ和やかな時間を過ごしてもらえるよう配慮している。	○	ご利用者の重度化や認知症の進行に伴い、ご家族も、ご利用者のその時々々の様子に不安を感じられる事が多いため、これまで以上に、話し合う機会を多く持ち、より良い関係を築いてもらえるような配慮が必要である。ご家族の中には、ご利用者と一緒に外出したいという希望を持っておられる方がいるため、今後、そういう機会をできるだけ多く持っていきたい。
30	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	行きつけの美容室や商店などを継続して利用できるよう支援している。必要に応じて、ご利用者の状況説明や、必要な配慮についても伝える機会を設けている。友人や知人の方が訪問しやすい雰囲気づくりに心がけ、来訪時は和やかな会話の時間が持てるよう、スタッフが間に入るなどしてフォローもしている。こちらからの働きかけだけでなく、行きつけの店や、知人の方からも、ご利用者の様子について、どういにかかわりや言葉かけをしたらよいかなどの相談がある事もある。	○	今年度については、ご利用者の外出支援がしやすいようなシフトに切り替えたため、ご利用者の思いを聴きながら、馴染みの人に会う機会や、馴染みの場所への外出など、個別の外出の機会を多く持っていきたいと思っている。
31	○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるように努めている	ご利用者同士の人間関係の把握はできており、良好な人間関係が保てるよう努めているが、食事などご利用者が同じ空間に集まれる時や、共同で作業される時などは、互いの習慣の違いや、思いの違いからトラブルになる事が多い。スタッフも、フォローしようと努めているが、上手いかわない事が多く、ケアが消極的になってしまう事がある。	○	ご利用者同士が和やかにかわり合えるようサポートできるよう、スタッフ間の連携を強化し、チーム全員でさりげなくフォローできるようにする。また、食事時間などについては、スタッフが間に入って、穏やかな楽しい雰囲気づくりを継続しながら、どうしてもフォローしきれない部分については、食事の席や、食事する空間についても、再度見直しを行う。

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
32	○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、継続的な関わりを必要とする利用者や家族には、関係を断ち切らないつきあいを大切にしている	在宅生活に復帰された方については、独居であったため、約5年間、ご利用者とともに自宅を訪問したり、ご家族や近隣の方、担当ケアマネ、ヘルパーステーションなどと連携をとりながら関係を継続し、今年6月に再度、入所していただいた。ターミナルケアを経て、今年4月に亡くなられた方については、その後も、ご家族がグループホームに立ち寄り下さったり、自宅を訪問させて頂くなどの関係が継続している。	○ 退所された方のみでなく、入所申し込みや、在宅介護の中での相談を受け付けた方達についても、電話や手紙のやりとりや、お話しする機会を継続して持ち、困った時、いつでも相談できる関係をつくっておきたいと思う。また、そのつながりの中から、私たちにできる事があれば、支援していければと思う。
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント			
1. 一人ひとりの把握			
33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	○ 日々の暮らしの中で、ご利用者の思いに真剣に向き合う事を大切にし、そこから、ご利用者の希望や意向の把握に努めている。スタッフの気づきや情報を共有し、ご利用者の希望にそった前向きな実践につなぐため、昨年度前半で、センター方式によるアセスメントに取り組み、後半では、カンファレンスの方法や記録類の様式の変更に取り組んだ。	○ 昨年度の取り組みである、センター方式によるアセスメントや、カンファレンスの持ち方の検討、記録類の様式の変更などの有効活用について、今年度はチームで検討し、ご利用者の思いにそったケアの実現に向けて取り組んでいきたい。
34	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	○ センター方式の活用により、把握に努めているが、人事異動や新規採用などで、新たにチームに加わったスタッフに対して、じゅうぶんに伝えられていないと感じる事がある。	○ 開設から5年間という時間の長さを理解し、新しくチームに加わったスタッフにも、センター方式や、ケース記録などの書面だけでは理解しにくい部分や、今のケアに至るまでのプロセスなども含めて丁寧に伝え、チーム全体で同じ意識を持って、ご利用者の暮らしを支えていけるようにする。
35	○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状を総合的に把握するように努めている	○ センター方式の活用や、記録様式の変更などに取り組んだ事により、以前より、ご利用者一人ひとりの思いや状況などについて、多方面から総合的に見て把握できるようになってきた。情報を共有するためのノートも作成し、より分かりやすくなった。	○ ご利用者の重度化や認知症の進行により、一人ひとりのご利用者のADL、一日の過ごし方、必要なかわりに、かなり個人差があるようになってきているため、一人ひとりのご利用者が必要とされているサポートについて、きちんと把握し、スタッフ間で連携をとって、適切に支援する必要がある。
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し			
36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	○ センター方式によるアセスメント、日々のご利用者とのかわりの中からの気づき、ご家族との話し合い、医師や看護師による医療面からの視点などをもとにチームでカンファレンスを行い、介護計画を作成している。	○ ご利用者の重度化や認知症の進行により、介護計画についても、しだいに、身体介護や、ADL介助のしめる部分が増えてきているが、そんな中でも、ご利用者の持っておられる力を引き出すためのアプローチや、持っておられる力の発揮など、前向きな介護計画の作成にチーム全体で取り組んでいきたい。
37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	○ 介護計画は、定期的には3ヶ月ごとに見直しを行っている。それ以外にも、状態に変化のあった場合は、随時、見直しを行っている。昨年の外部評価以後、毎日のケース記録を、介護計画にそって記録ができ、モニタリングのしやすい様式に変更し、ケアカンファレンスのあり方についても見直しを行った。	○ 昨年度、ケース記録の様式や、ケアカンファレンスのあり方について見直しを行ったため、今年度については、その有効活用について、チームで検討していきたい。

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
38	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録以外に、必要なお利用者については、24時間の気持ちシートを活用して、より細かに思いの把握ができるようにしている。特に重要な事、きちんと情報を共有しなければならない事については、共有ノートに記入している。記録様式などの変更後、介護計画にそった記録ができるようになってきたが、記入もれがあったり、振り返りが不十分な場合がある。	○	スタッフ一人ひとりが、ご利用者とのかわかりの中で気づきや考察を、きちんと記録に残すよう意識し、チームで情報を共有しながら、介護計画の作成に活かしていく。
3. 多機能性を活かした柔軟な支援				
39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	総合施設のメリットを活かし、ご利用者やご家族の状況や要望に応じて、柔軟な対応ができるように努めている。ご利用者の重度化や、ターミナル期への対応、緊急時の対応など、グループホームだけでは対応が困難な場合についても、併設施設や他職種との連携により、支援が継続できるようにしている。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働				
40	○地域資源との協働 本人の意向や必要性に応じて、民生委員やボランティア、警察、消防、文化・教育機関等と協力しながら支援している	消防署と合同の火災想定訓練を実施したり、緊急時の警察との連携、地域の小学校との交流行事など、法人全体で協力の得られる関係作りをすすめている。一人ひとりのご利用者の意向や必要性に応じた協力については、趣味の会への参加や、法人内で講師を招いての陶芸教室、踊りや歌などの訪問などを行っている。	○	今年度の事業計画にもあるが、グループホームに傾聴ボランティアの導入を検討中である。
41	○他のサービスの活用支援 本人の意向や必要性に応じて、地域の他のケアマネジャーやサービス事業者と話し合い、他のサービスを利用するための支援をしている	現在では、地域の他のサービス事業者のサービス利用はしていない。法人が総合施設であり、グループホーム入所中のご利用者も、入所前から、法人の在宅サービスを利用されていた方が多いため、本人の希望にて法人内のデイサービスを利用されている。入浴などについて、グループホーム内で困難になられた場合は、併設施設の機械浴を利用してもらっている。		
42	○地域包括支援センターとの協働 本人の意向や必要性に応じて、権利擁護や総合的かつ長期的なケアマネジメント等について、地域包括支援センターと協働している	現在では、必要性は認められない。今後必要となった場合は、地域包括支援センターとの協働をすすめていく。運営推進会議の委員として、地域包括支援センターの職員も参加していただいているため、協力しやすい関係は築けている。		
43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ほとんどのご利用者が、入所前から、法人の協力医療機関である綾部市立病院がかかりつけであり、現在も継続して受診している。受診時はスタッフが付き添っているが、可能であれば、ご家族も一緒に行き、主治医の話を聞いてもらっている。入院されるご利用者も増えてくる中で、病棟の看護師や、相談員ともカンファレンスをする機会が増え、グループホームの状況も理解してもらっているため、ほとんどの場合、安心して医療にかかる事ができている。		

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)	
44	○認知症の専門医等の受診支援 専門医等認知症に詳しい医師と関係を築きながら、職員が相談したり、利用者が認知症に関する診断や治療を受けられるよう支援している	綾部市立病院の神経内科を定期受診し、ご利用者の状況について報告し相談している。長期間継続して受診しているため、主治医はご利用者の状況や対応についての配慮などについて理解してくれており、特に問題となるケースはない。今後、さまざまな困難なケースも予想されるため、認知症の専門医といったような医師の存在があり、安心して受診できるような医療機関があれば理想的ではある。	○	現時点では、協力医療機関である綾部市立病院の医師と、より良好な関係を築き、ご利用者のさまざまな状況に対して、安心して医療が受けられる関係作りに努めていきたい。在宅にて認知症の方の介護をされているご家族から、医療面での相談を受ける事も多いため、認知症専門医や、専門的や診断や治療、アドバイスが受けられる医療機関についての情報収集にも努めていきたい。
45	○看護職との協働 利用者をよく知る看護職員あるいは地域の看護職と気軽に相談しながら、日常の健康管理や医療活用の支援をしている	グループホーム配属の看護師を中心に、第二松寿苑の看護師と連携をとりながら、ご利用者の体調管理を行っている。併設施設の看護師には、宅直や緊急時の対応などの協力体制もとってもらっているため、情報提供書に、その日1日のご利用者の状況を記入し、毎日、夕方に引き継ぎを行っている。受診の必要がある場合には、主に、綾部市立病院の看護師と情報提供やカンファレンスの機会を持っている。		
46	○早期退院に向けた医療機関との協働 利用者が入院した時に安心して過ごせるよう、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて連携している	入院された時点から、ご家族、主治医、担当看護師とカンファレンスを行い、納得して医療が受けもらえるよう努めている。また、入院中も、可能な限り病院を訪問し、ご利用者の状況把握に努め、主治医や担当看護師と話し合う機会を持ち、早期退院に向けて働きかけている。そういったかわりを繰り返す中で、病院側も、グループホームのケアについて理解を深めてくださり、入院中から、ご利用者の退院後の暮らしについて、親身になって考えてくださっていると感じる事が多い。		
47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	入所前から、ご家族に重度化やターミナル期への対応について説明し、ご家族の思いを聴いている。ターミナルケアの必要性が生じた場合は、ご家族とともに主治医からの説明を聞いた上で、ご家族の意向を踏まえ、グループホームでのターミナルケアを希望される場合は、グループホームのターミナルケア、重度化対応に関する指針をもとに説明し、同意書にて同意を得ている。また、同意を得た後でも、ご利用者のその時々状況に応じて、ご家族と話し合う機会を繰り返し持ち、ご家族の思いの把握に努めている。	○	昨年よりターミナル期となられた方が、今年4月にグループホームでお亡くなりになられた。その方のターミナルケアをとおしての学びはとても大きく、今後、それをケアに活かしていきたい。ターミナルケアに取り組む中で、マニュアルを整える事、スタッフ全員に周知する事の大切さ、他部署や医療機関との連携の大切さを強く感じたため、今後チームでカンファレンスを行い整えていきたい。少人数の暮らしの中でのターミナルケアにおいて、スタッフのメンタル面でのサポートも充実させていきたい。
48	○重度化や終末期に向けたチームでの支援 重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、事業所の「できること・できないこと」を見極め、かかりつけ医とともにチームとしての支援に取り組んでいる。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている	開設から5年が経過する中で、ご利用者の重度化も進んでくる中、ご利用者の状況に応じて、併設施設の医務室や協力医療機関と話し合いをし、ご利用者の重度化対応、ターミナルケアに対する体制づくりに努めている。ご家族とも、必要に応じて話し合いの機会を持ち、起こりうるリスクや、終末期に向けての対応、グループホームにできる事の説明などの機会を持ち、ご家族の思いを聴き、ご家族にとっても、ご利用者にとっても納得のできる対応について検討している。	○	ご利用者の重度化がかなり進行し、胃ろう造設の方、吸引や点滴の必要な方、常にバイタルチェックを行いながら様子観察の必要な方などがおられる中、今後もご家族と話し合いを繰り返し、互いに理解しあい、支え合って、ご利用者の暮らしを支えていけるようにしたい。スタッフも、ご家族やご利用者の思いをしっかりと受け止め、穏やかな時間を過ごしてもらえるようなケアを提供していきたい。そのためには、スタッフのスキルアップ、マニュアルや連携体制の整備に努めていきたい。
49	○住み替え時の協働によるダメージの防止 本人が自宅やグループホームから別の居所へ移り住む際、家族及び本人に関わるケア関係者間で十分な話し合いや情報交換を行い、住み替えによるダメージを防ぐことに努めている	在宅復帰されたご利用者については、ご利用者とともに自宅を訪問したり、ご家族や地域の方、担当ケアマネ、訪問介護事業所、配食サービス担当者などと連携をとりながら、在宅での暮らしを支えてきた。また、自宅より入所される方については、入所前からご家族や担当ケアマネ、サービス担当者で話し合いの機会を多く持ち、使い慣れた家具を持ち込んでいただいたり、自宅での暮らしのペースを大切にケアに努めている。		

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援			
1. その人らしい暮らしの支援			
50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	一人ひとりのご利用者に合った言葉かけた対応を心がけているが、ご利用者の状況により、排泄や入浴介助時の対応が難しい方もおられ、スタッフの思いが先行してしまい、ご利用者の思いに沿わない言葉かけや対応となってしまう事がある。そういった事について、スタッフ間でカンファレンスを行い、自分たちのかかわりについて振り返りを行うよう心がけている。記録などは事務所にて管理している。法人の個人情報内部チェック委員会にて、定期的に聞き取り調査も行っている。	○ 馴染みの関係を大切にしながら、一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重したかかわりを常に意識し、自分たちのかかわりを振り返る機会を繰り返し持っていききたい。
51	○利用者の希望の表出や自己決定の支援 本人が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかる力に合わせた説明を行い、自分で決めたり納得しながら暮らせるように支援をしている	それぞれのご利用者の状況に応じて、思いを聞き出すための働きかけや、分かりやすい対応を心がけているが、認知症の進行や重度化にともない、思いを表現する事が困難になってこられる方も多く、スタッフ中心になってしまっているのではないかと感じる事もある。	○ ご利用者が思いを表出しやすいようなかかわりや、それぞれのご利用者の状況に合わせたアプローチを検討し、そこから見えてきた思いや気づきをチームで共有し、実践につないでいきたい。また、センター方式の見直しも随時行い、それぞれのご利用者に合った、働きかけや分かりやすい説明などを検討していきたい。
52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	思いや希望の表現が難しくなってくる方も多く、各場面でご利用者の思いを聴く事はしているが、一日の流れをスタッフが作っているのではないと思う。思いを聴こうと働きかけても、返答がない方もあり、そういった場合は、言葉かけの方法や環境を変えるなどの工夫をし、できるだけ、ご利用者の思いを聴き出せるよう努めてはいるが、難しいと感じる事が多い。	○ 今後、これまで以上に、ひとつひとつの場面で、ご利用者の思いを丁寧に確認するように心がけ、思いや希望を理解した上で、支援できるよう努めていく必要がある。
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援			
53	○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援し、理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている	身体的に可能なご利用者については、行きつけの美容室を利用してもらい、困難になってきた方については、美容室の方と相談し、訪問カットを行っていただいている。毎日の洋服選びや化粧なども、スタッフがサポートしながら行っている。	
54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	料理本やスーパーのチラシを見ながら、ご利用者と一緒に献立を考え、一緒に買い物に行き、準備や片付けなどを一緒に行っている。食事準備や片付けにかかわっておられるのが一定のご利用者にかたよっており、他のご利用者についても、アプローチを工夫すれば力を発揮してもらえるのではないかと感じる事もある。ご利用者同士の人間関係を考慮しながら、楽しく食事できるような席も考えているが、トラブルになってしまう事も多い。	○ 食事の準備や後片付けを、自分の役割だと認識しておられるご利用者の思いを大切にしながら、他の方についても思いを聴き、場面を工夫しながら、力を発揮してもらえる機会作りを検討する。スタッフのみでやってしまう事もあるため、一緒にできる事は何かを考え、スタッフ間で連携を取りながら、ご利用者の力を活かしていけるよう努める。食事中はスタッフが間に入り、会話をしながら、できるだけ楽しい雰囲気の中で食べてもらえるよう心がける。
55	○本人の嗜好の支援 本人が望むお酒、飲み物、おやつ、たばこ等、好みのものを一人ひとりの状況に合わせて日常的に楽しめるよう支援している	糖尿や肥満、高血圧などで、制限のあるご利用者もおられる中、できるだけ好みを聴いて対応するようにしているが、個別の対応が不十分だと感じる事もある。お酒は、行事などの際は、希望される方に飲んでもらっている。ご利用者と一緒に、季節に合ったお菓子を考え、毎月、一緒に作って楽しんでもらっている。	○ もう一度、それぞれのご利用者の好みを丁寧に聴き提供する。お茶会や苑内の喫茶など、ご利用者の希望を聞いて利用してもらう。お菓子や嗜好品などのメニューを作成し、ご利用者が自分で選びやすいような工夫をする。

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
56	○気持ちよい排泄の支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして気持ちよく排泄できるよう支援している	個別に排泄状況を記録し、排泄パターンや排泄のサインを把握し、トイレ誘導や介助を行っている。常時オムツ使用のご利用者については、定時での交換が主になっている。夜間や外出時など、場面に応じて、紙オムツや紙パンツ、尿とりパットなどを使用してもらい快適に過ごしてもらえるよう心がけている。	○	個別の排泄状況の記録をもとに、排泄パターンを知り、一人ひとりのご利用者に合わせたタイミングでのオムツ交換を行っていく。引き続き、それぞれのご利用者の状況に合わせた排泄用品を検討していく。
57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	グループホームの浴槽にて入浴が可能な方については、ほぼ毎日、その方の習慣やタイミングに合わせて入浴してもらっているが、身体的に機械浴でないと入浴できない方については、基本的には、曜日や時間帯を決めてしまっている。体調などにより、決めた曜日や時間帯に入浴ができない場合の変更は可能である。体調が悪く入浴できない方については、清拭を行っている。	○	季節や天候、その日の過ごし方により、希望にそった入浴ができるよう対応していく。また、入浴前のかかわりから入浴中の声かけ、雰囲気づくりなどをし、楽しんで入浴し、清潔を保持してもらえるようにしていきたい。
58	○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、安心して気持ちよく休息したり眠れるよう支援している	それぞれのご利用者の習慣や体調、その時々状況に合わせて、安心して休んでもらえるような環境や対応を考えているが、夜間、不眠傾向にあり、日中、居眠りされる事が多いご利用者もおられる。	○	夜間、安心してゆっくり休めるようなかかわりや環境、日中の過ごし方を考えていく。
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援				
59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	昔の趣味や得意な事を活かした外出や趣味活動、作業に取り組んでもらうよう努めているが、重度化にともない、食堂やロビー、居室での生活が中心になってきてしまっている方もおられる。外出支援のしやすいシフトに変更してから、季節を感じられるような外出の機会は増えてきている。外出しにくい方については、希望を聞きながら苑内のお茶会や喫茶を利用してもらっている。	○	スタッフのアプローチを工夫し、家事や畑仕事、趣味活動など、ご利用者の力を発揮してもらえる機会づくりに努める。季節を感じられるような行事についても、ご利用者と相談しながら、積極的に計画、実施していく。
60	○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的には金銭は預からず、立替にて買い物を行っているが、希望のあるご利用者については、ご家族と相談し、自分で金銭を所有してもらっている方もある。買い物の際、自分でお金を支払ってもらう事への支援ができていない場合が多い。	○	買い物の際、スタッフと1対1で出かけるなどして、ゆっくりとかかわれるような体制をつくり、ご利用者に自分で支払いをしてもらえるような機会づくりを行っていく。
61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	今年度より、外出支援のしやすいシフトに変更し、外出の機会は増えてきている。季節の花の見学や地域行事への外出など、その都度、希望を聞くようにしているが、その時々状況により、希望に添う事が困難な場合もある。外出状況の記録を作成して、外出先での様子などを記録している。	○	日常の会話の中で、外出についての希望が聞けるようなかかわりを持つ。可能であれば、ご家族にも協力を依頼する。外出状況の記録を有効に活用し、今後の外出支援に活かしていく。
62	○普段行けない場所への外出支援 一人ひとりが行ってみたい普段は行けないところに、個別あるいは他の利用者や家族とともに出かけられる機会をつくり、支援している	ご利用者の希望にそった外出や気分転換の散歩、買い物、趣味を活かしての外出、ご家族や友人との外出などの機会をできるだけ多く持てるよう努めているが、身体状況や体調などにより、外出の機会の少ないご利用者もおられる。外出支援のしやすいシフトに変更したが、ご利用者の重度化にともない、個別の外出のためのスタッフの確保が困難な場合も増えてきている。	○	日常の会話の中で、外出についての希望が聞けるようなかかわりを持ち、スタッフ間で連携をとりながら計画し、シフトなども工夫しながら個別に外出できる機会を設ける。可能であれば、ご家族にも協力を依頼する。

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
63	○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族や友人からの電話や手紙は比較的多く、それに対して、電話で会話されたり、手紙の返事を書かれる事などへの支援はできているが、自ら行動される事への支援は、一部のご利用者以外には、不十分である。	○	電話にて会話する力、文字を書く力を持っておられるご利用者は数名おられるため、スタッフの働きかけ次第で、そういった形でのご家族や友人の方との交流は可能であると思う。
64	○家族や馴染みの人の訪問支援 家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪問でき、居心地よく過ごせるよう工夫している	面会時間は設けず、いつでも気軽に訪問してもらえるようしている。訪問時には、和やかな時間を過ごしてもらえるよう配慮しているが、ご利用者の状態によっては、不安や戸惑いを見せられるご家族や、友人の方もおられる。ほとんどのご家族が、可能な範囲で訪問の機会をできるだけ多く持たせてくださっているが、中にはもう少しご家族と過ごされる時間を持っていただく事で、精神的な安定につながるのではないかと感じられる利用者もおられる。	○	ご利用者の状況に応じて、スタッフが気配りしたり、日常の様子を丁寧に伝えるなどして、できるだけ和やかな時間を過ごしてもらえるようにする。もう少し、ご家族との時間が必要なのではないかとと思われる方については、ご家族とゆっくり話し合う機会を設け、ご利用者の現状や、ご家族の存在の必要性を理解していただけるよう働きかけていきたい。
(4) 安心と安全を支える支援				
65	○身体拘束をしないケアの実践 運営者及び全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、身体拘束をしないケアに取り組んでいる	ご利用者の思いをくみ取り、安全に安心して暮らしてもらう方法を検討する中で、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。外部研修に参加したり、法人の身体拘束ゼロ推進委員会にて手引きの作成や、研修の機会を持ち、それをもとにチームでカンファレンスを行い、意識の向上に努めている。		
66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	夜間以外は施錠していない。ご利用者にとっての安心できるかわりや環境について考え、事故やアクシデントの防止に努めているが、未確認のうちの外出というヒヤリハット事例も時々見られる。そういった場合も想定して、併設施設に見守りや連絡などの協力体制も依頼しており、サポートしてもらう事もある。近隣住民の方とも、グループホームご利用者が一人で歩いておられるのを見かけられたら、声をかけてくださったり、連絡して下さる関係ができています。	○	ご利用者の思いに丁寧に向き合い、スタッフ間で連携をとる中で、自由に出入りできる事からのリスクを最小限にとどめられるようにする。併設施設や近隣住民の方にも、ご利用者の状況に変化があった際など、プライバシーに配慮しながら、きちんと情報を伝えるようにする。
67	○利用者の安全確認 職員は本人のプライバシーに配慮しながら、昼夜通して利用者の所在や様子を把握し、安全に配慮している	ご利用者と同じペースで暮らす中で、自然な形で所在や様子を把握し、スタッフ間で情報を伝え合いながら、安全確保に努めている。夜間も睡眠を妨げないよう配慮しながら、見守りを行っている。		
68	○注意の必要な物品の保管・管理 注意の必要な物品を一律になくすのではなく、一人ひとりの状態に応じて、危険を防ぐ取り組みをしている	ご利用者にとって必要なものについては、所持してもらったり、暮らしの空間の中に置いておくようになっている。リスクを伴い、スタッフの配慮や確認が必要なものについては、その情報をチームで共有し、安全確保に努めている。	○	ご利用者それぞれに、ADLが低下されたり、視力の低下などが見られる中、物品の取り扱いについても、それまでには見られなかったリスクが生じてくる方もおられるため、常にきめ細かく、ご利用者の様子を観察し、そこからの気づきは早く情報を共有し、安全を確保していけるよう努める。
69	○事故防止のための取り組み 転倒、窒息、誤薬、行方不明、火災等を防ぐための知識を学び、一人ひとりの状態に応じた事故防止に取り組んでいる	事故や緊急時のマニュアルを作成し、ご利用者の状況に応じ、予測されるリスクについても確認の機会を設けている。事故やアクシデント発生時は、アクシデント報告書に記録し、未然に防げた場合についても、ヒヤリハット・ケアレスミスを記録し、カンファレンスを行い、スタッフの危機意識の徹底を図り、再発防止に努めている。法人内に緊急マニュアル整備委員会を設置し、見直しや改善、スタッフへの周知方法などについて検討している。	○	今年度のQC活動にて、「ヒヤリハットの有効活用」についての取り組みを行っているため、その活動を通して、ご利用者の望まれる暮らしの実現と、リスク管理について、チームで考える機会としたい。

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
70	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備え、全ての職員が応急手当や初期対応の訓練を定期的に行っている	事故発生時や急変時の対応については、法人緊急マニュアル整備委員会を中心としてマニュアルを作成し、それをもとにグループホームの現状に即した対応について検討している。ご利用者の重度化に伴い、体調の急変などのリスクも高まってきており、それぞれのご利用者に予測されるリスクについて検討を行っているが、スタッフの経験や技術、知識などにより不安を感じる点もある。	○	既存のマニュアルをもとに、各ケースについて対応の確認を繰り返すとともに、より現状に即した学びの機会を設け、急変時や事故発生時に適切な対応ができるよう、スタッフの育成に努める。また、医務室とも情報交換を密に行い、緊急時の連携、協力体制を整える。
71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	法人全体で消防計画を作成し、防火管理委員会を設置し、マニュアルを作成するとともに、避難訓練を計画し実施している。火気取締責任者による自主点検や、業者による消防設備点検、使用訓練も行っている。毎月15日には、安全管理委員によるセーフティチェックにて、施設内の安全点検を行っている。消火器、火災報知機、感知器なども設置している。スプリンクラーは未設置であるが、今年秋以降、設置予定である。	○	ご利用者の重度化、認知症の進行により、火災時や災害時の非難誘導など、次第に困難になってくる事が予測されるため、併設施設との協力体制や、火災や災害時の避難誘導の方法、連絡体制などについて、日常から繰り返し話し合う機会を持つ。
72	○リスク対応に関する家族等との話し合い 一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にされた対応策を話し合っている	ご利用者の高齢化、重度化に伴い、転倒や、転倒による骨折などのアクシデントも増えてきている中、予測されるリスクについて、ご家族と話し合う機会をできるだけ多く持つようにし、理解していただいた上で、ご利用者の思いに添った暮らしの実現とリスク管理について検討している。ヒヤリハット・ケアレスミスを記録しているが、活用がじゅうぶんにできていないと言えない。	○	今年度のQC活動にて、「ヒヤリハットの有効活用」についての取り組みを行っているため、その活動を通して、ご利用者の望まれる暮らしの実現と、リスク管理について、チームで考える機会としたい。
(5) その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援				
73	○体調変化の早期発見と対応 一人ひとりの体調の変化や異変の発見に努め、気付いた際には速やかに情報を共有し、対応に結び付けている	すべてのご利用者について、食事や水分摂取、排泄や入浴状況などを記録し、体調の変化の早期発見に努めている。より細かな状態観察が必要な方については、状態に即した記録を作成している。ご利用者の疾病などにより必要な場合には、毎日のバイタルチェックや、定期的な血糖値の測定なども行っている。併設施設の医務室にも、ご利用者のその日の体調について、情報提供書にて連絡し、夜間や緊急時の協力が得やすい体制づくりに努めている。	○	ご利用者の高齢化、重度化が進む中、体調の悪化や急変のリスクが高まってきているため、チームで、それぞれのご利用者の体調や疾病についての学びの機会を繰り返し持ち、日常の状態から異常や体調の悪化に早く気づける知識や技術を身につけられるよう、スタッフの育成に努める。
74	○服薬支援 職員は、一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬状況や、副作用などについて、いつでも確認できるようファイルを作成している。また、看護師からも説明の機会を持っている。服薬時にはスタッフが見守りや介助を行い、服薬チェックシートに記入を行い、確実に服薬できるようにしている。症状の変化の確認などについては、必要時、看護師から、観察方法や注意点などについての説明を行っている。	○	服薬内容に変更があった際や、新たに服薬開始された時には、看護師からの説明を行っているが、繰り返し確認や説明の機会を持つようにし、スタッフの理解を深めていく。
75	○便秘の予防と対応 職員は、便秘の原因や及ぼす影響を理解し、予防と対応のための飲食物の工夫や身体を動かす働きかけ等に取り組んでいる	便秘気味のご利用者については、食事内容や、水分摂取、適度な運動の機会などにより、便秘の予防に努めているが、改善が難しい方もおられ、必要時には、下剤の服用や浣腸、摘便などを施行している。排便状況の記録を行っている。	○	便秘の及ぼす影響についてチーム内で再度確認し、食事や水分摂取、運動など、生活全般から、便秘予防について検討し、快適に過ごしていただけるよう支援する。
76	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や力に応じた支援をしている	それぞれのご利用者の状況に応じ、歯磨きやうがい、義歯洗浄、口腔内清拭などを行っているが、朝、夕はほぼ確実に実施できているが、昼食後の口腔ケアが不十分になってしまう事がある。	○	昼食後についても、暮らしの流れの中で、自然と口腔ケアを行えるよう、それぞれのご利用者の状況に応じた対応方法やタイミングを検討し、実施する。

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	それぞれのご利用者の食事、水分摂取量を記録し状況を把握している。ご利用者の状況に応じ、食事形態や水分摂取の方法についても看護師や管理栄養士とともに検討し、対応している。栄養バランスや摂取カロリーについては、レストラン部の管理栄養士によりチェックを行っている。	○ 胃ろうからの注入食の方、流動食の方、減塩食の方や、誤嚥性肺炎のリスクの高い方など、食事に関して個別に対応する必要のある方が多くなってきたため、主治医や看護師、管理栄養士と話し合いながら、食事を安全に楽しみながら、適度な栄養を確保できるよう検討していく。
78	○感染症予防 感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、実行している(インフルエンザ、疥癬、肝炎、MRSA、ノロウイルス等)	法人の感染症対策委員会によりマニュアルを作成し、それをもとに、グループホームの現状に即した対応方法を検討し、実施している。感染症が発生した場合の備品も、すぐに持ち出して使用できるように準備している。毎月行われる感染症対策委員会より、感染症についての情報提供や注意喚起も行われており、苑内研修にて具体的な対応方法などについての研修の機会も持っている。インフルエンザの予防接種については、ご利用者、全スタッフに対して実施している。	○ 1年を通して、スタッフが感染症に対する危機意識を継続できるよう、繰り返し確認する機会を持つ。新型インフルエンザの流行にそなえ、うがい・手洗いの徹底、受診時のマスク着用など、スタッフのより一層の危機意識の強化を図る。
79	○食材の管理 食中毒の予防のために、生活の場としての台所、調理用具等の衛生管理を行い、新鮮で安全な食材の使用と管理に努めている	食材の保存や管理、調理器具の衛生管理になどについては、レストラン部の管理栄養士から、方法などについて指導を受け対応している。法人の感染症対策委員会により、衛生管理の定期的な調査や注意喚起も行っている。食中毒注意報が発令された場合は、法人の総務より、すぐに連絡が入り、全スタッフに伝えとともに、キッチンに掲示している。	○ スタッフの危機意識の継続のため、日々のカンファレンスの中で、繰り返し確認する機会を持つ。また、ご利用者についても、暮らしの自然な流れの中で、うがいや手洗いなど、清潔が保持できるよう働きかける。
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり (1)居心地のよい環境づくり			
80	○安心して出入りできる玄関まわりの工夫 利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、安心して出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている	玄関周辺の花壇やプランターに花を植え、ベンチや床机を置いて、外を眺めながら談話できるようにしている。年中行事の際は、七夕飾りやクリスマスのリース、門松やお飾りなど、季節を感じてもらえるよう雰囲気づくりをしている。また、屋内には、ご利用者の作品を飾っている。	
81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	中庭には花を植え、食堂からも季節を感じられるようにしている。廊下や玄関、事務所にはソファを置き、ご利用者が気に入った場所でゆっくりとくつろげるようにしている。食堂は、食事するスペースと、テレビを見たり、余暇時間を自由に過ごせる空間とに分け、暮らしのリズムを作りやすいようにしている。食堂や廊下カウンターには、季節の花を飾ったり、廊下の掲示板や壁などには、ご利用者の作品を飾るなどして、雰囲気づくりに努めている。	○ 食堂から見える中庭にて季節の花を育てることで、季節を感じてもらったり、ご利用者自らが、水やりなどの世話をしようという思いを持ってもらえるよう、日常の会話の中で働きかける。
82	○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中には、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂と居間は襖で仕切られており、それぞれのスペースにテレビを置き、気の合う小グループでくつろげる空間づくりをしている。廊下や玄関、事務所内にもソファを置き、それぞれのご利用者が、その時の気分に応じて、居心地の良い場所で過ごせるよう工夫している。	

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組んでいきたい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご家族と相談し、使い慣れた家具などを持ち込んでもらっているが、居室内の雰囲気づくりについては、ご利用者によって、かなり個人差があり、殺風景な印象を受ける部屋もある。家具を持ち込まれていたが、すべて押し入れにしまい込んでしまわれるようになった方については、様子を見ながら、しまい込まれたものを元に戻し、雰囲気づくりをしてみているが、しばらくすると、また自分でしまい込んでしまわれる。頻繁に、ご家族が宿泊される方については、ご家族の荷物も持ち込まれている。	○	重度化に伴い、居室で過ごされる事も増えてくるため、それぞれのご利用者にとっての居心地の良い空間について、継続して検討していく。ご家族にも、居室の雰囲気づくりの大切さを伝え、理解してもらった上で、協力していただけるよう働きかける。
84	○換気・空調の配慮 気になるにおいや空気のおよみがないよう換気に努め、温度調節は、外気温と大きな差がないよう配慮し、利用者の状況に応じてこまめに行っている	頻繁に居室の窓を開け換気している。特に失禁の多いご利用者の居室などについては、空気清浄機や消臭器を置くなどしているが、臭いの気になる箇所もある。居室や共同スペースには、温湿度計を設置し、必要に応じて、それぞれのご利用者に適した形でエアコンを使用し、快適に過ごしていただけるよう配慮している。畳やソファ、車なども、1日1回、イオン水を散布している。	○	清掃や消毒をこまめに行い、清潔を保持するとともに、それぞれのご利用者の排泄パターンを把握し、トイレ誘導や早めのオムツ交換などにて、気持ちよく過ごしていただくとともに、失禁による臭いを軽減していく。
(2) 本人の力の発揮と安全を支える環境づくり				
85	○身体機能を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの身体機能を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物内はバリアフリーで、手すりや車椅子用トイレなども設置している。浴室の床面は滑りにくい素材を使用しており、浴室出入り口や浴槽内には、滑り止めマットも使用している。重度化に伴い歩行が不安定になってこられる方も多く、ご利用者の状況に合わせて、車椅子や歩行器などの使用してもらったり、歩きやすい靴を履いてもらうなどしている。転倒のリスクの高い方の居室内や、廊下などの手すりのない空間には、ソファなど手すり代わりにできる物を置いて転倒を防止している。	○	センター方式の見直しを行い、できる事、できない事をチームで共有する。ヒヤリハット、ケアレスミスを記録し、それをもとにチームでカンファレンスを行い、安全な環境の中で、できるだけ自立した暮らしを送ってもらえるよう検討していく。
86	○わかる力を活かした環境づくり 一人ひとりのわかる力を活かして、混乱や失敗を防ぎ、自立して暮らせるように工夫している	一人ひとりのご利用者に適した、さりげないサポートや声かけにて、持っておられる力を発揮して、できるだけ自立して暮らしてもらえよう心がけているが、認知症の進行に伴い、分からない事が増え、不安や苛立ちを見せられる事多いご利用者に対して、上手くかかわれない事も多い。動きのあるご利用者へのかかわりに偏ってしまい、座っておられる事多いご利用者へのかかわりが不十分になってしまう事もある。	○	ご利用者の不安定さを意識しすぎるのではなく、そういった中でも、時折見せてくださる、「自分から何かしたい」といった思いや動きに気づき、そこから力を発揮できる場面へつないでいく。ご利用者が思いを表現しやすいような場面づくりや、言葉かけなど、積極的な働きかけも行っていく。
87	○建物の外周りや空間の活用 建物の外周りやベランダを利用者が楽しんだり、活動できるように活かしている	玄関前付近や中庭には、花壇やプランターなどで花を育てている。建物の周囲には畑があり、野菜を作り収穫を楽しんでいる。過ごしやすい季節には、中庭でバーベキューや流しそうめんを楽しんだり、ベンチや床机で、ゆっくりお茶を飲みながら、会話を楽しんだりしている。建物周囲に何箇所か洗濯物干し場を設置し、スタッフと一緒に洗濯物を干してもらっている。	○	建物周囲や中庭などの広い空間を有効利用し、ご利用者の楽しみや活動の機会を増やせるよう、日常の暮らしの中で、声かけや働きかけを行い、ご利用者の趣味活動や作業への意欲を引き出す。

V. サービスの成果に関する項目		最も近い選択肢の左欄に○をつけてください。	
項目			
88	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる		①ほぼ全ての利用者の
		○	②利用者の2/3くらいの
			③利用者の1/3くらいの
			④ほとんど掴んでいない
89	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある	○	①毎日ある
			②数日に1回程度ある
			③たまにある
			④ほとんどない
90	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている		①ほぼ全ての利用者が
			②利用者の2/3くらいが
		○	③利用者の1/3くらいが
			④ほとんどいない
91	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている	○	①ほぼ全ての利用者が
			②利用者の2/3くらいが
			③利用者の1/3くらいが
			④ほとんどいない
92	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている		①ほぼ全ての利用者が
			②利用者の2/3くらいが
		○	③利用者の1/3くらいが
			④ほとんどいない
93	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごさせている		①ほぼ全ての利用者が
			②利用者の2/3くらいが
		○	③利用者の1/3くらいが
			④ほとんどいない
94	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている		①ほぼ全ての利用者が
			②利用者の2/3くらいが
		○	③利用者の1/3くらいが
			④ほとんどいない
95	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています	○	①ほぼ全ての家族と
			②家族の2/3くらいと
			③家族の1/3くらいと
			④ほとんどできていない

グループホーム たのやま

項 目		最も近い選択肢の左欄に○をつけてください。	
96	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている		①ほぼ毎日のように
		○	②数日に1回程度
			③たまに
			④ほとんどない
97	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている	○	①大いに増えている
			②少しずつ増えている
			③あまり増えていない
			④全くいない
98	職員は、生き活きと働けている		①ほぼ全ての職員が
			②職員の2/3くらいが
		○	③職員の1/3くらいが
			④ほとんどいない
99	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う		①ほぼ全ての利用者が
			②利用者の2/3くらいが
		○	③利用者の1/3くらいが
			④ほとんどいない
100	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う		①ほぼ全ての家族等が
			②家族等の2/3くらいが
		○	③家族等の1/3くらいが
			④ほとんどできていない

【特に力を入れている点・アピールしたい点】

(この欄は、日々の実践の中で、事業所として力を入れて取り組んでいる点やアピールしたい点を記入してください。)

ご家族や地域の方とのつながりを大切にし、ご利用者の暮らしをともに支えていける関係づくりに努めている。